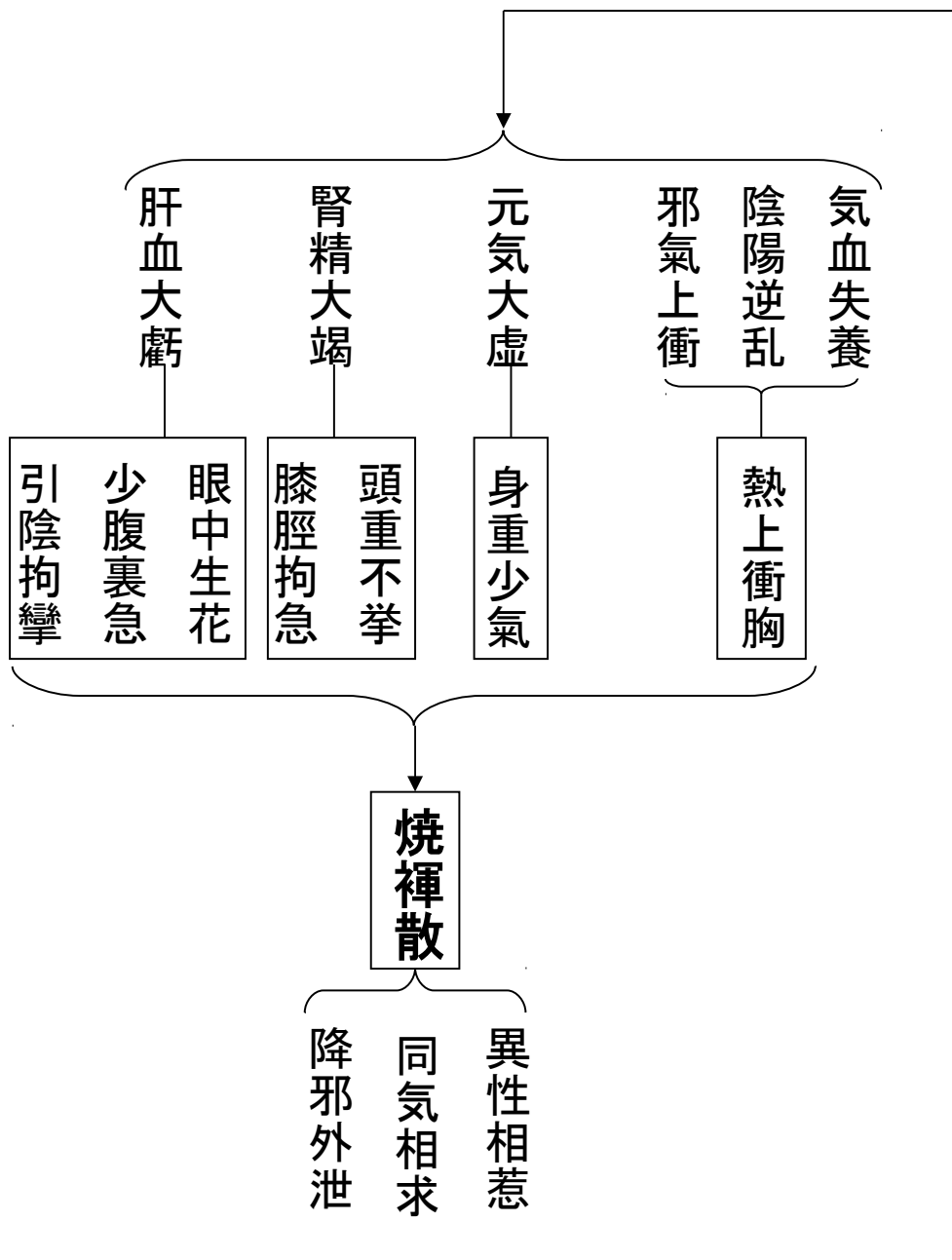
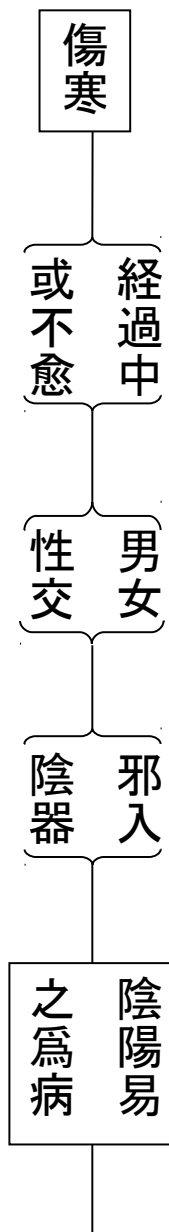


并陰陽易差後勞復病脈証并治

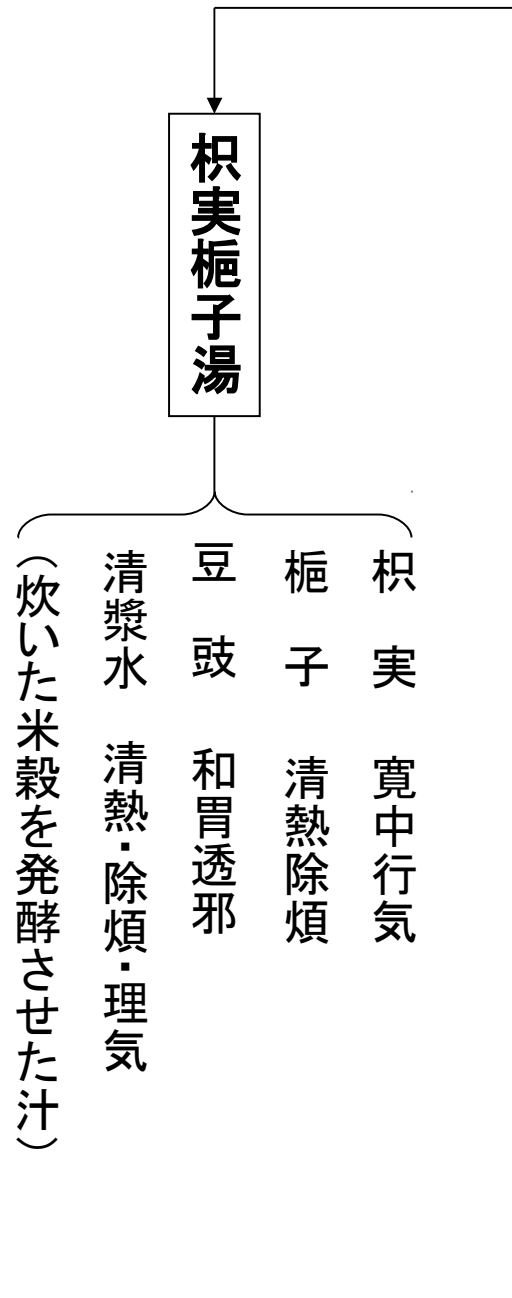
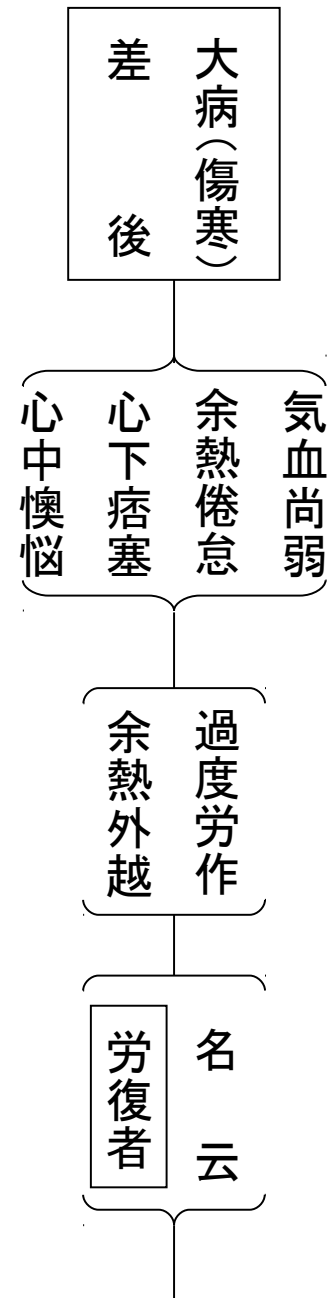
(陰陽易の証と治)

第三九二条 傷寒陰(陽易)之爲病、其人身体重、少氣、少腹裏急、或引陰中拘攣、熱上衝胸、頭重不欲舉、眼中生花、膝脛拘急者、**燒禪散**主之。

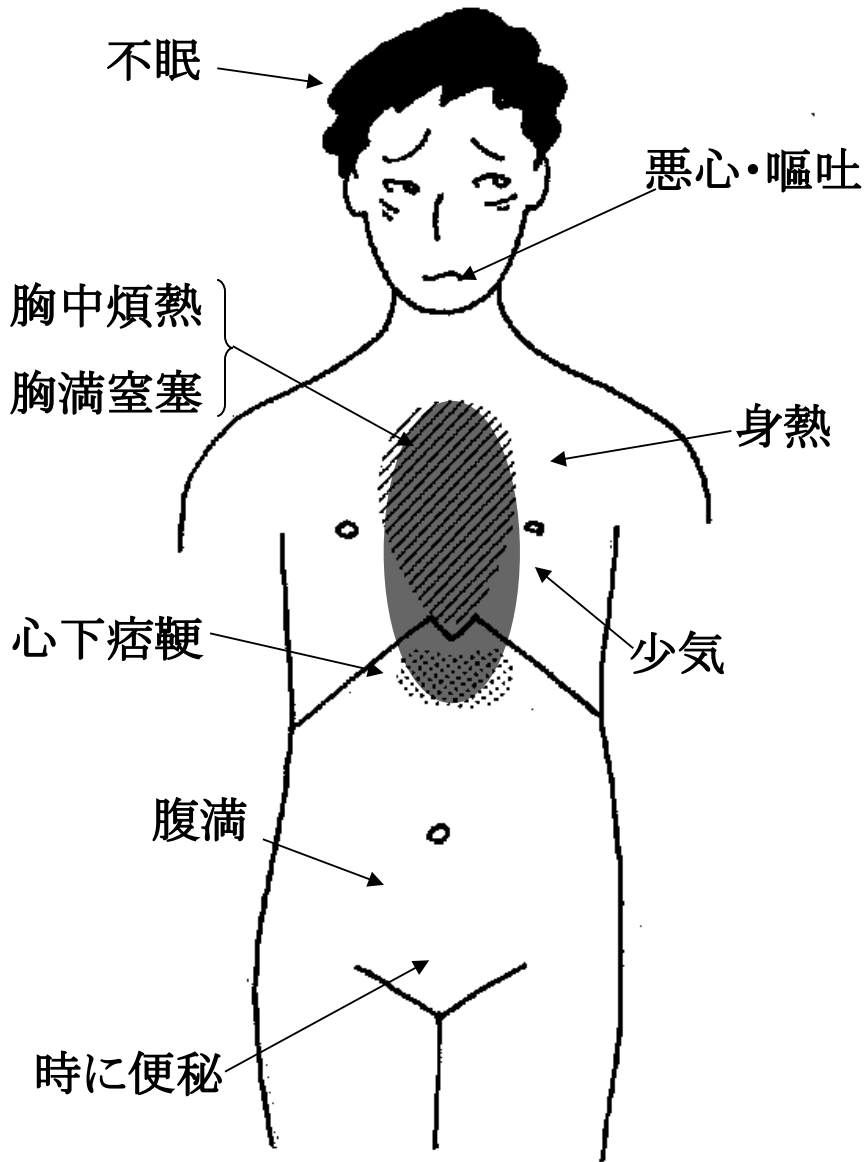


(労復病の証・治)

第三九三条 大病差後労復者、枳実梔子湯主之。



大病後労復する者は 枳実梔子湯の証



方 意

労復病は傷寒などの大病が一応治癒した後、余熱が残留して解されず、気血の回復も不十分で正気も未だ虚している時期に、食べ過ぎや過度の労作やをして、病が再発するものである。

残余の邪熱が外越して発熱し、心中懊悩・胃部不快感・悪心などがあり、時に腹満して便秘を伴う。

枳実梔子湯の処方内容

枳実 3枚炙ル

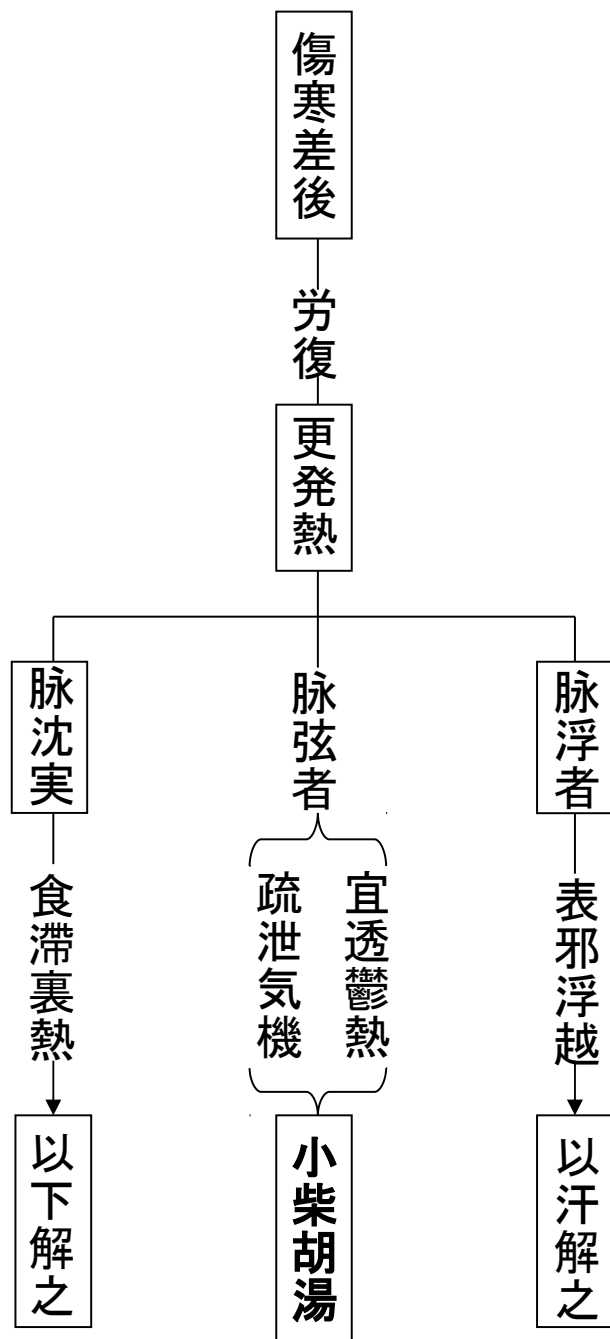
梔子14箇劈ク

豆豉 1升、綿二テ裏ム

(梔子豉湯に枳実一味を加える)

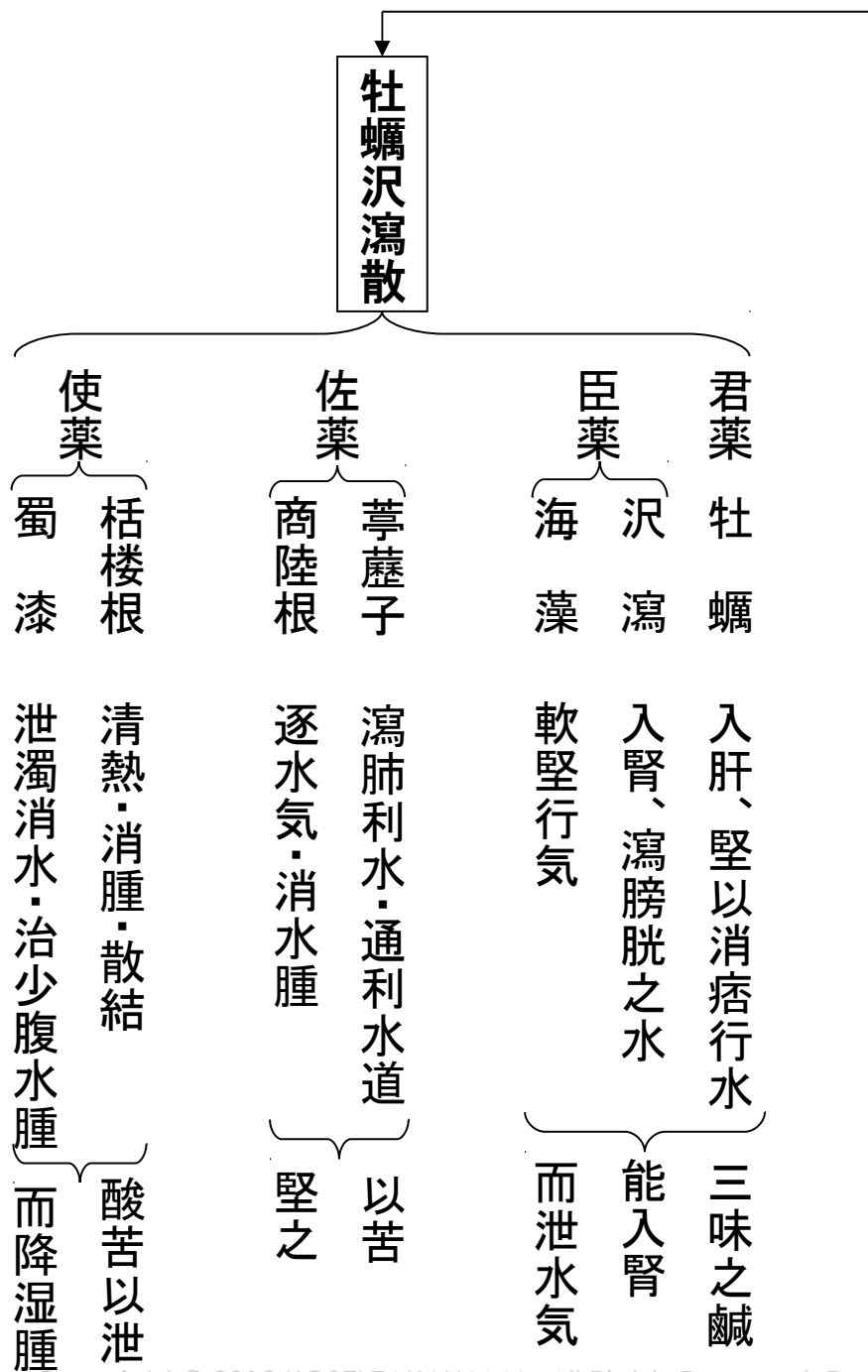
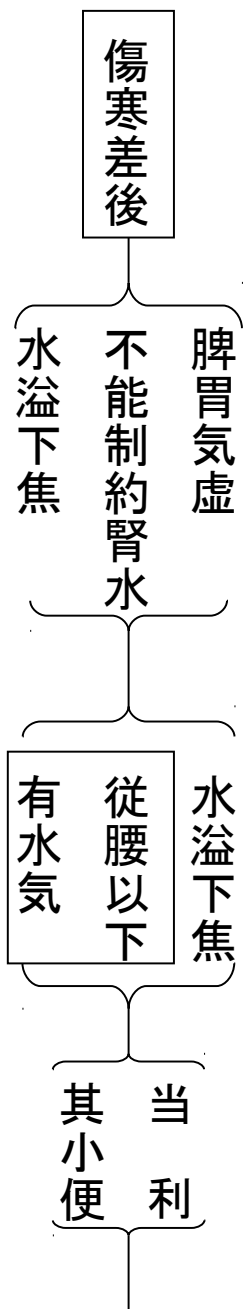
治は証・脉に随う

第三九四条 傷寒差以後更発熱、小柴胡湯主之。脉浮者、以汗解之。脉沈実者、以下解之。



（大病後水氣停滯）

第三九五條 大病差後、從腰以下有水氣者、牡蠣沢瀉散主之。



大病後のむくみは

牡蠣沢瀉散の証

ぶよぶよ肥満

汗はない

尿不利

しびれ

下肢に押すと凹む浮腫

方 意

傷寒などの大病の後、病気が愈えても、傷寒の余熱が残存し、中焦脾胃の陽気は虚して、下焦の腎水を制御することが出来なくなり、下焦に水気が停滞するので、尿が出難くなって腰から下に浮腫を生じる。

処 方

牡 蠣：軟堅、消痞行水。

沢 瀉：膀胱導水利尿。

栝楼根：清熱、生津。

商陸根：峻逐水邪。

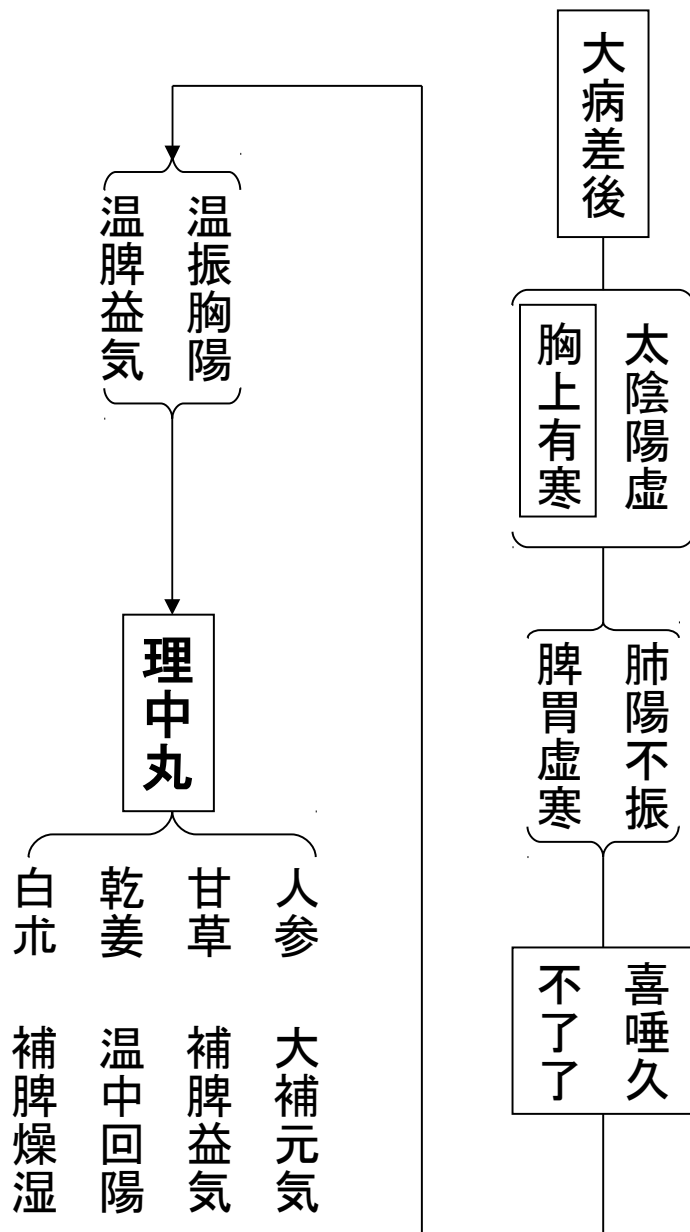
葶藶子：瀉肺利水。

蜀 漆：祛痰、化水。

白飲(重湯)で
服用、逐水清熱

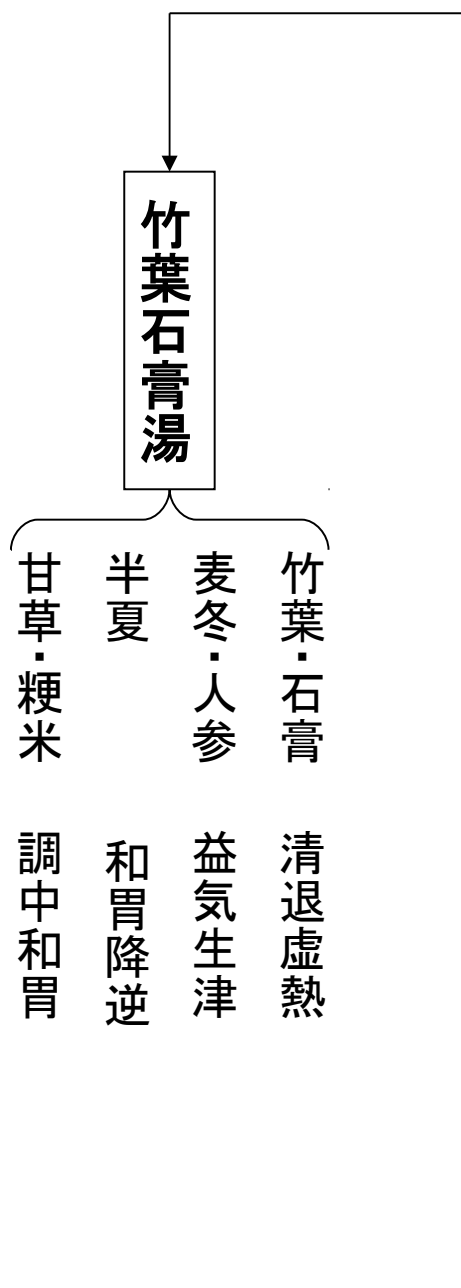
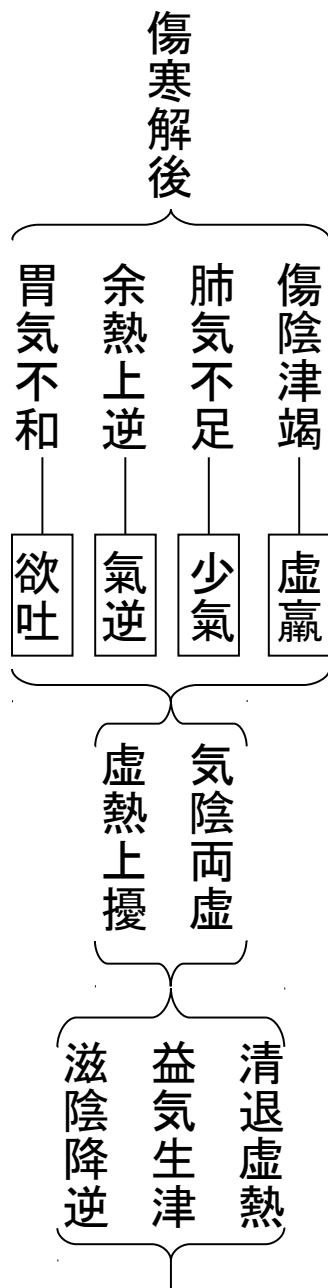
(病後胸上虚寒)

第三九六条 大病差後、喜唾、久不了了、胸上有寒、当以丸藥
温之、宜理中丸。

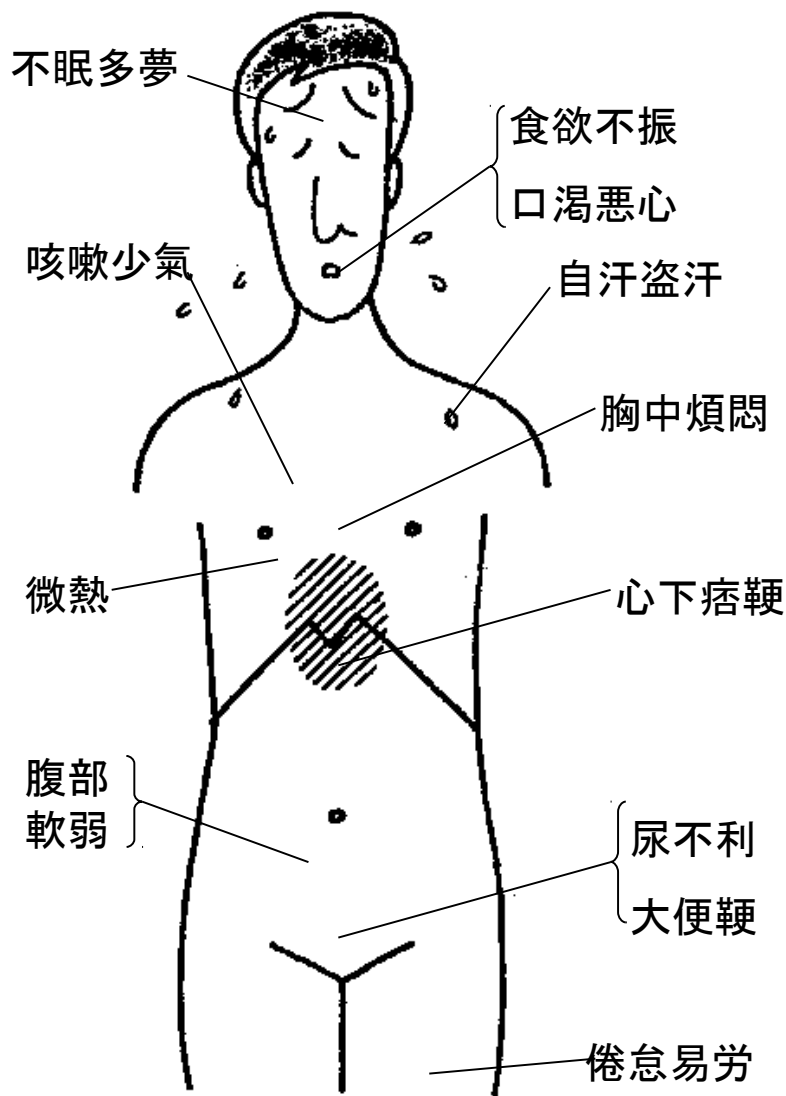


（傷寒後氣陰兩虛、氣逆）

第三九七条 傷寒解後、虛羸少氣、氣逆欲吐、竹葉石膏湯主之。



邪熱未清で気陰両虚は 竹葉石膏湯の証(傷寒論)*



原典

傷寒解シテ後、羸虚シテ少氣、氣逆シテ吐サン欲スルハ竹葉石膏湯之ヲ主ル。

(『傷寒論』陰陽易差後勞復病篇397条)

方意

傷寒やその他大病の後、体力が衰え津液も欠乏すると、気陰両虚に陥り、全身倦怠感、食欲不振、体重減少などを呈す。

体力が衰えるので息切れがし、傷寒の余熱が残存して虚熱が上逆すると欬嗽や嘔気を生じるのを、脾肺の気を補い、津液を生じ、和胃降逆により治す。

竹葉石膏湯証

主証：虚羸少氣、氣逆欲吐。

客証：体力消耗、津液欠乏、体重減少、食欲不振、欬嗽、微熱、胸中煩悶、口渴、不眠、自汗、盗汗。

脉は細数にして無力。

舌は舌質紅でやや乾燥、苔は薄い。

腹は軟弱、心下痞鞭を認める。

竹葉石膏湯(傷寒論)の処方と功能

君薬 竹葉(2把): 辛淡甘寒。上焦の風邪煩熱を除き、心を涼し、脾を緩め、渴を止める。

臣薬 石膏(1斤): 辛甘大寒。清熱・止渴・除煩。君臣両薬で気分の邪熱を宣透清泄して、煩を除く。

佐薬 半夏(半升): 辛温、有毒。麦門人參に配合し止嘔止咳。

使薬 人參(2両): 甘微苦微温。益氣生津、脾肺を補い止渴。

甘草(2両): 甘平。補中益氣、潤肺祛痰、諸薬調和。

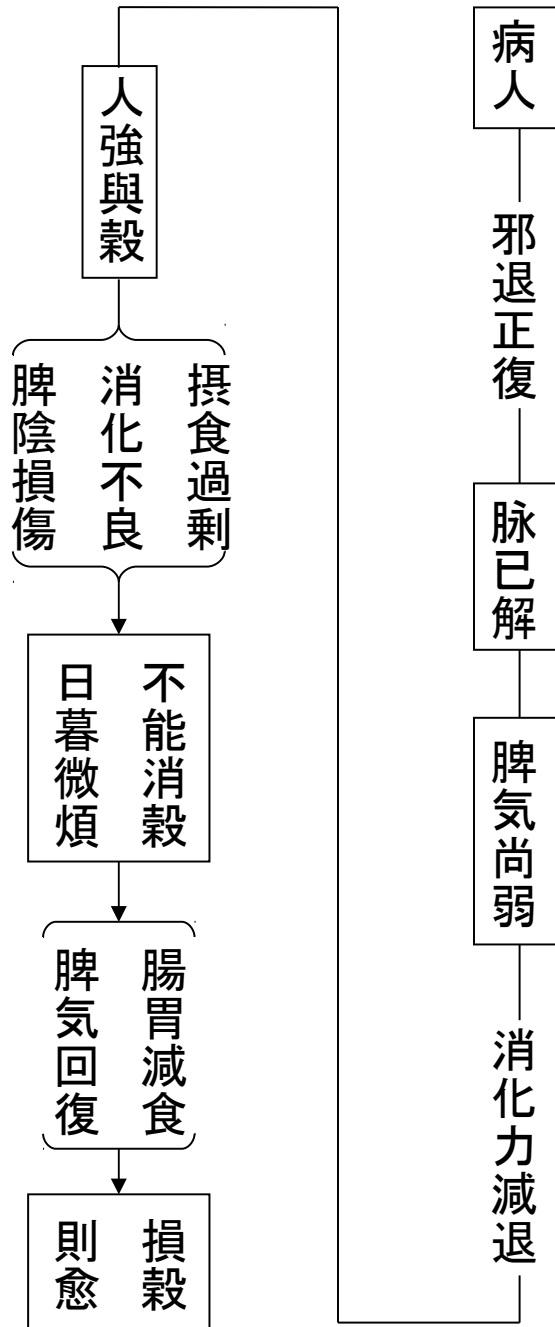
麦門(1升): 甘微苦微寒。滋陰清津。半夏と組むと降逆して止嘔止咳の働きが強化される。

粳米(半升): 甘涼。甘草と共に和中養胃に働く。

全体として傷寒の邪熱残余、氣陰両虚して咳嗽少氣する者を治す。

(大病後の養生)

第三九八条 病人脉已解、而日暮微煩。以病新差、人強與穀、脾胃氣尚弱、不能消穀、故令微煩。損穀則愈。



病人は大病の後、未だ脾胃の氣が十分回復していないので、無理に食べさせると、負担に耐えず脾陰を損傷するので、脾陰虚に陥って日暮れに発熱微煩する。食を減じて脾胃の負担を軽減してやれば、脾胃の氣の完全な回復と共に症状は自然に消失する。

1、傷寒六経の提綱証

1、太陽病

太陽病は足太陽膀胱経が主る体表部と泌尿器の病である。外感病の多くは太陽病から発症するが、手太陰肺の病証を伴うことが多い。(肺之合ハ皮也)

1条 太陽ノ病タル、脉浮、頭項強痛シテ悪寒ス。

(1)太陽経証

中 風

2条 太陽病、発熱シ、汗出デ、悪風シ、脉緩の者ハ名ズケテ中風と爲ス。

12条 太陽ノ中風ハ陽浮ニシテ陰弱。発熱汗出悪寒シ、鼻鳴リ乾嘔スル者ハ桂枝湯之ヲ主ル。

傷 寒

3条 太陽病、或ハ已ニ発熱シ、或ハ未ダ発熱セザルモ、必ズ悪寒シ、体痛ミ、嘔逆シ、脉陰陽俱ニ緊ノ者ハ名ズケテ傷寒ト爲ス。

35条 太陽病、頭痛、発熱、身疼、悪風、汗無クシテ喘ス者ハ麻黄湯之ヲ主ル。

痺証

174条 傷寒八九日、風湿相搏チ、身疼煩シテ轉側スル能ワズ。嘔セズ、渴セズ、脉浮虚ニシテ濇ノ者ハ桂枝附子湯之を主ル。

火逆証

112条 傷寒脉浮ナルニ、医火ヲ以テ之を劫セバ、陽ヲ亡シ必ズ驚狂ス。起臥安カラザル者ハ蜀漆牡蛎竜骨救逆湯之ヲ主ル。

虚煩証

76条 発汗、吐下後虚煩シテ眠ルヲ得ズ、心中懊悩スルハ梔子豉湯之ヲ主ル。

結胸証

135条 傷寒六七日、結胸熱実、脉沈ニシテ緊、心下痛ミ之ヲ按ジテ石の如キハ大陷胸湯之ヲ主ル。

心下痞

149条 傷寒五六日、嘔シテ発熱、他薬ヲ以テ之ヲ下ス。柴胡ノ証仍在ル者ハ柴胡湯ヲ與ウベシ、心下滿痛スル者ハ結胸タリ。但滿シテ痛マザルハ痞タリ、半夏瀉心湯ガ宜シ。

(2) 太陽腑証

蓄水証

71条 太陽病、発汗後、大ニ汗出、胃中乾燥シ煩躁シテ眠ルヲ得ズ、飲水ヲ得ント欲シ、脉浮、小便不利、微熱、消渴スル者ハ五苓散之ヲ主ル。

蓄血証

106条 太陽病解セズ、熱膀胱ニ結ビ、其人狂ノ如ク、血自カラ下ル。外解シ已リテ但ダ小腹急結スル者ハ桃核承気湯ガ宜シ。

2、陽明病

陽明病は足陽明胃経が主る胃を中心とした消化管の病である。陽明経は気血旺盛なので経証は内外俱熱盛、腑証は多く消化管の気滯実熱である。

180条 陽明ノ病爲ル、胃家実是レ也。

(1) 陽明経証

内外熱盛証

222条 渴シテ水ヲ飲マント欲シ、口乾キ舌燥ク者ハ白虎加人參湯之ヲ主ル。

下焦湿熱証

223条 若シ脉浮、発熱シ、渴シテ水ヲ飲ムヲ欲シ、小便不利ノ者ハ猪苓湯之ヲ主ル。

湿熱黄疸証

236条 陽明病、但ダ頭汗出デ、身ニ汗無ク、小便不利、渴シテ水漿ヲ引ク者ハ、瘀熱裏ニ在リ、身必ズ黄ヲ発ス。茵陳蒿湯之ヲ主ル。

陽明瘀血証

237条 陽明病、喜忘スル者ハ必ズ蓄血有リ。屎鞭シト雖モ大便反テ易ク、其色黒キ者ハ抵当湯ニテ之ヲ下スガ宜シ。

(2)陽明腑証

胃実熱証

208条 陽明病、脉遅ニシテ汗出ルト雖モ惡寒セズ、身重ク、短氣シ、腹滿潮熱有リテ、大便已ニ鞭キ者ハ大承氣湯之ヲ主ル。

胃虚寒証

243条 穀ヲ食シテ嘔セント欲スハ陽明ニ属ス也。呉茱萸湯之ヲ主ル。

3、少陽病

少陽病は足少陽胆経と手少陽三焦経の病を指す。肝胆は胸脇に位置し、太陽の表にも陽明の裏にも連るので半表半裏とされ、陽氣を転送するので陽経の枢である。三焦は水液の通路の役目を果たしている。

263条 少陽の病為ル口苦ク、咽乾キ、目眩ム也。

96条 傷寒五六日中風、往来寒熱、胸脇苦満、黙々トシテ飲食ヲ欲セズ、心煩喜嘔スル者ハ小柴胡湯之ヲ主ル。

4、太陰病

太陰病は足太陰脾経に連なる脾の疾患である。“実スレバ陽明、虚スレバ太陰”と謂われるように陽明胃とは表裏の關係にあり、脾胃の虚寒証で、消化機能が減衰すると共に寒飲が内停し、腹満嘔吐や下痢腹痛を生じる。

273条 太陰ノ病為ル、腹滿シテ吐シ、食下ラズ、自利益甚シク時ニ腹自ラ痛ミ、若シ之ヲ下セバ必ズ胸下結鞭ス。

277条 自利シテ渴セザルハ太陰ニ属ス。寒有ルヲ以テの故也。四逆輩。

279条 本太陽病、医反テ之ヲ下シ、因リテ腹滿シテ時に痛ムハ太陰に属ス也。桂枝加芍薬湯之ヲ主ル。

5、少陰病

少陰病は足少陰腎経と手少陰心経の病である。少陰は陰陽の根本であり、全身の陰陽水火を統括している。循環器系と水飲代謝を始め内分泌系、免疫などの異常は皆少陰病に属す。少陰は太陽と表裏を爲すので太陽病と少陰病は互いに転換され易い。

281条 少陰ノ病為ル、脉微細ニシテ但ダ寝ント欲ス。

1) 腎陽虚証

323条 少陰病、脉沈ノ者ハ急ギ之ヲ温メヨ。四逆湯ガ宜シ。

314条 少陰病ノ下利ハ白通湯之ヲ主ル。

308条 少陰病、下利、膿血便ノ者ハ桃花湯之ヲ主ル。

(2)腎陰虚証

285条 少陰病、脉沈細ニシテ数ノ者ハ病裏ニ在ルト爲ス、髮汗スベカラズ。

293条 少陰病八九日、一身尽ク熱キ者ハ熱膀胱ニ在ルヲ以テ必ズ便血ス。

303条 少陰病、二三日以上、心煩シ、臥スヲ得ザレバ黄連阿膠湯之ヲ主ル。

6、厥陰病

厥陰病は陰証の極まるところで、足厥陰肝経の病である。肝は気血の調整を主るので厥陰の病では寒熱虚実が錯雑する。厥陰は少陽と表裏をなす。

326条 厥陰ノ病為ル、消渴シ、氣上リテ心ヲ撞キ、心中疼熱シ、飢ユレドモ食ヲ欲セズ、食スレバ則虵ヲ吐シ、之ヲ下セバ利止マズ。(寒熱錯雑)

351条 手足厥寒、脉細ニシテ絶エント欲ス者ハ当帰四逆湯之を主ル(厥冷)

370条 下痢清穀シ、裏寒外熱、汗出デ厥ス者ハ通脉四逆湯之ヲ主ル(寒利)

371条 熱利下重ノ者ハ白頭翁湯之ヲ主ル。(厥陰病の熱利)

傷寒六經の処方配当(記載篇順)

1、太陽病(第1条～第178条)

1) 経 証

(1) 太陽中風証

正証 12) 桂枝湯

兼証 14) 桂枝加葛根湯(項背強)、18) 桂枝加厚朴杏子湯(喘)、

類証 23) 桂麻各半湯、25) 桂枝二麻黃一湯、27) 桂枝二越婢一湯

変証 20) 桂枝加附子湯、21) 桂枝去芍薬湯、桂枝去芍薬加附子湯、
29) 甘草乾姜湯、29) 芍薬甘草湯、68) 芍薬甘草附子湯

(2) 太陽傷寒証

正証 35) 麻黄湯、

兼証 31) 葛根湯(項背強)、38) 大青龍湯(熱鬱)、40) 小青竜湯(痰飲)、
63) 麻杏甘石湯(肺熱) 144) 小柴胡湯(熱入血室)

合病 太陽与陽明 32) 葛根湯、33) 葛根加半夏湯、35) 麻黄湯

併病 太陽与少陽 146) 柴胡桂枝湯、147) 柴胡桂姜湯、172) 黄芩湯・黄芩加半夏湯

類証 痺 証 174) 桂枝附子湯、174) 去桂加白朮湯、175) 甘草附子湯

痰飲証 28) 桂枝去桂加白朮茯苓湯 (水滯)、152) 十棗湯(懸飲)、
162) 瓜蒂散(寒痰)、73) 茯苓甘草湯(於心下)、

変証 協熱下利 34) 葛根黄芩黄连湯、165) 桂枝人参湯

気血両虚 62) 桂枝加芍薬生姜各一両人参三両新加湯

気虚痰飲 66) 厚朴生姜半夏甘草人参湯、

少陰虚寒証 61) 乾姜附子湯、65) 苓桂甘棗湯、67) 苓桂朮甘湯、
69) 茯苓四逆湯

少陰心陽虚 69) 桂枝甘草湯、177) 炙甘草湯

火逆証 112) 救逆湯、117) 桂枝加桂湯、118) 桂枝甘草竜骨牡蛎湯

虚煩証 76) 梔子豉湯、76) 梔子甘草豉湯、76) 梔子生姜豉湯、

79) 梔子厚朴湯、80) 梔子乾姜湯

結胸証 131) 大陷胸丸、135) 大陷胸湯、138) 小陷胸湯、141) 白散(寒実結胸)

心下痞 149) 半夏瀉心湯、154) 大黃黃連瀉心湯、155) 附子瀉心湯

157) 生姜瀉心湯、158) 甘草瀉心湯、

類証 159) 赤石脂禹餘糧湯、161) 旋覆代赭湯、173) 黃連湯(上熱下寒)

2) 腑 証

(1) 太陽蓄水証

正証 71) 五苓散

(2) 太陽蓄血証

正証 106) 桃核承氣湯、124) 抵当湯、126) 抵当丸

2、陽明病(179条～262条)

1) 經 証

(1) 内外熱盛証 正証 219) 白虎湯、 兼証 222) 白虎加人參湯(氣津兩虛)

(2) 湿熱黄疸証 正証 236) 茵陳蒿湯、261) 梔子柏皮湯、262) 麻黃連軹赤小豆湯

(3) 下焦湿熱証 正証 223) 猪苓湯

(4) 下焦瘀血証 正証 237) 抵当湯

2) 腑 証

(1) 胃実熱証 正証 207) 調胃承氣湯、213) 小承氣湯、208他) 大承氣湯

合病 陽明与少陽 256) 大承氣湯

類証 235) 蜜煎導(津竭)、247) 麻子仁丸(脾約)

(2) 胃虚寒証 正証 243) 吳茱萸湯

3、少陽病(263条～272条)

1) 半表半裏証 正証 96他) 小柴胡湯、兼証 100) 小建中湯

合病 三陽合病 99) 小柴胡湯、219) 白虎湯

併病 三陽併病 107) 柴胡加竜骨牡蠣湯

少陽与陽明 103) 大柴胡湯、104) 柴胡加芒硝湯

4、太陰病(273条～280条)

1)脾虚寒下利証

正証 四逆輩(388)理中丸、163)桂枝人参湯、225他)四逆湯)

2)陰陽不和腹痛証

正証 279)桂枝加芍藥湯、 兼証 279)桂枝加大黃湯(便秘)

5、少陰病(281条～325条)

1)腎陽虚証

(1)表裏兩感証 正証 301)麻黄細辛附子湯、 兼証 302)麻黄甘草附子湯

(2)裏寒虚証 正証 323他)四逆湯、 兼証 316)真武湯、304他)附子湯

(3)裏寒下利 正証 314)白通湯、315)白通湯加猪胆汁湯、
兼証 306)桃花湯(膿血便)、385)四逆加人参湯(寒霍乱)

2)腎陰虚証 正証 303)黄連阿膠湯、319)猪苓湯(下焦水熱互結)

兼証(咽痛) 310)猪膚湯、311)甘草湯、桔梗湯、312)苦酒湯、313)半夏散及湯

3) 眞寒仮熱証 225) 四逆湯、317) 通脉四逆湯

4) 眞熱仮寒証 318) 四逆散、320) 大承気湯

6、厥陰病(326条～381条)

1) 四逆厥冷証

正証 351) 当帰四逆湯、352) 当帰四逆加呉茱萸生姜湯、354) 四逆湯

類証 355) 瓜蒂散、356) 茯苓甘草湯

2) 寒熱錯雜証

正証 338) 烏梅丸、 変証 357) 麻黄升麻湯、 359) 乾姜黄芩黄連人參湯

3) 寒厥下痢証 正証 370) 通脉四逆湯、

4) 熱利下重証 正証 371) 白頭翁湯

5) 回陽過剩熱証 350) 白虎湯、379) 小柴胡湯、374) 小承気湯

注) 変証は多く誤治に因って本来の経から他の経に逸脱したものである。多くは本来あった経(場所)に記されているが、本当は正しい場所に移すべきである。

傷寒六経の考え方各種

- 1、単純に傷寒の進行段階を現すと考える。
- 2、病邪と正氣の勢力関係の変転を示すと考える。
- 3、傷寒の邪は浅部より深部に達するので、病邪は太陽より厥陰に次第に深達すると考える。
- 4、単純に六経は独立した症候群と考える。
- 5、傷寒六経を風寒燥湿火熱の六気と関連させる。
- 6、六経を体表を六つに分割した各々に対応させる。
- 7、六経を12の臓腑経絡に対応させて弁証する。

六経弁証とは何か

六経とは、太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰を指す。六経弁証は本来傷寒という外感性熱性疾患について、その発病から最終段階までを三陽三陰の6つの病型に分類したものである。すなわち太陽、陽明、少陽は陽病、太陰、少陰、厥陰は陰病とする。

六経の各病は疾患の発展段階を現すと共に、病変部位に関しては人体を表裏と六つの部位に分割して病位を示す。太陽病は表、陽明病は裏、少陽病は半表半裏、三陰病はすべて裏証である。また三陽病は主に六腑と陽経脈の、三陰病は主に五臓と陰経脈の病変とそれぞれに対応している。

病というのはすべての臓腑経絡にまたがっており、六経を弁証すれば病の進展段階だけでなく、病邪の所在も明らかにして病変部位も特定できるので、病を根源から治療することができる。

また病の進展段階と病変部位を同時に明らかに出来る六経弁証は単に傷寒だけでなく雑病の弁証論治にも広く適用しうる理論体系である。

六経弁証の方法

総ての病気を『傷寒論』に従い弁証する方法である。

六経とは、太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰を指す。

(1) 先ず陽病と陰病に大別し、次に6つの病型に分類。

太陽、陽明、少陽は陽病。太陰、少陰、厥陰は陰病。

(2) 病の部位

太陽病は表、陽明病は裏、少陽病は半表半裏。

三陰病はすべて裏証。

(3) 三陽病は六腑と陽経脉の、三陰病は五臓と陰経脉に連携する。

六経弁証における傷寒と雑病

傷寒の他は総て雑病である。病は六経から離れることはないので、六経によって統括することができる。(柯琴)

『傷寒論』の条文を熟読すれば、三陽病の部分は主に風寒の邪に因る傷寒の諸証を論じているように見えるが、三陰病も含めた全文を見ると、傷寒の進展変遷と共に雑病についても論じられていることが容易に理解される。

『傷寒雑病論』は本来は傷寒と雑病を結びつけて共に論じていたのであるが、後世『傷寒論』と『金匱要略』に分かれて伝えられた爲に傷寒と雑病は別物という誤解を生じたと推測される。『傷寒論』には傷寒と雑病が一緒に弁証論治されていると認識できれば、自然に、傷寒だけでなく雑病もふくめた総ての疾病に六経弁証を用いる意味を理解することができる。張仲景も述べているように、総ての疾病が傷寒金匱の処方だけで対応できるものではないが、六経弁証の本質と、条文ごとの正しい方証相對の方法を理解できれば、経方に限らず後世方の処方にも正しく対応できて一層有効な治療効果を得られるであろう。

六経弁証と八綱弁証の相違

六経弁証は八綱には無い視点を持ち、八綱と六経は互いに補完し合う関係にある。

1)陰 陽

六経弁証では原則的に熱は陽に属し寒は陰に属す。三陽病は原則的に陽で三陰病は陰証であるが、条文により三陽病篇中に陰証がありまた逆の場合もある。

八綱弁証では陰陽の概念はさらに発展させられ総合的なものになっている。

2)疾病の性質と病変部位の特定

八綱弁証では寒熱、虚実という概念によって弁証に際して疾病の性質は明確に把握できるが、表裏という概念だけでは最も重要な病変の部位を確定することができず、これを明らかにするには六経による臓腑経絡弁証に依る定位を待たねばならない。

3)病の伝変を把握

傷寒だけでなく、雑病も亦た邪気と正気の勢力関係に因り虚実が変化すると共に病変部位も伝変する。八綱弁証は観点が固定的でこの点については全く触れられていないが、六経弁証は流動する病変部位を毎回の確に把握しながら対処できる。

傷寒六経と臟腑経絡との関係

傷寒六経の病変は臟腑経絡と対応している。

太陽病	膀胱、小腸。足太陽膀胱経、手太陽小腸経	腑・陽経脉
陽明病	胃、大腸。足陽明胃経、手陽明大腸経	
少陽病	胆、三焦。足少陽胆経、手少陽三焦経	
太陰病	脾、肺。足太陰脾経、手太陰肺経	臓・陰経脉
少陰病	腎、心。足少陰腎経、手少陰心経	
厥陰病	肝、心包。足厥陰肝経、手厥陰心包経	

六経の各経はすべて手足二経に別れ合計十二正経である。各経は総て臟腑と連結しており、各臟腑は経脉を介して互いに影響し合い不可分の関係にある。臟腑経絡上も三陽病は陽、三陰病は陰となる。

六経の各病期ではまず所属する臟腑経絡の病理変化が現れる。

六経弁証の長所

- 1、『傷寒論』は傷寒と雑病の両方を論じているので、傷寒も雑病も共に弁証できる。
- 2、証候分類が明快で理解しやすい。
- 3、病気の進行段階を経とし、病邪の所在を緯として、両者を同時に弁証できる。
- 4、六経相互の関連は緊密で、病状の変化にも対応しやすい。

ヒトも六経に沿って老化する

六 経	太 陽	陽 明	少 陽	太 陰	少 陰	厥 陰
年 代	青年期	壮年期	更年期	初老期	老年期	晩 年
臓 腑	足膀胱	足 胃	足 胆	足 脾	足 腎	足 肝
経 絡	手 肺	手大腸	手三焦	手小腸	手 心	手心包
部 位	皮膚肺 泌尿器	胃 腸 消化器	肝、胆 子 宮	脾胃肉 消化器	心、腎 循環器	脳神経 筋肉
多い病	肺の病 アレルギー 性疾患	メタボ 症候群	自律神 経失調 心身症	ガン年齢 胃腸病 成人病	老人病 動脈 硬化症	認知証 脳卒中
常 見 症 状	カ ゼ 体 質 異 常	不節制 肥満症	ストレス う つ	食欲減 羸 瘦 易 労	居眠り 難 聴 健 忘	失 禁 徘徊 譫 妄

ヒトも六経に沿って老化する

1、青少年期は気少、 だが有り余る未来 太陽病の季節

「太陽の病タル、脉浮、頭項
強痛シテ悪寒ス」

太陽病は体表とそれに連なる

呼吸器の疾患を包括している。年齢に関係なく外感病は太陽病で始まることが多い。

小児に多いアレルギー性疾患や過敏体質は太陽病と考える。



ヒトも六経に沿って老化する

2、壮年期は気血充実

人生の華

陽明病の時期

「陽明の病タル、胃家実是也」

陽明病は胃即ち消化管の病である。

陽明経は多気多血、氣力体力充実し滅多に大病することはなく、健康にも自信を持っている。旺盛な食欲にまかせて節制を欠き、肥満を原因としたメタボ症候群や二次性糖尿病などに罹り後年の太陰病、少陰病の原因を作ることになる。



ヒトも六経に沿って老化する

3、更年期は人生の曲角

40にして陰気半ばす

少陽病の時代

「少陽ノ病タル、口苦ク、咽乾キ、目眩スルナリ」

若き日は早や夢と去り、多事多難の年代

である。少陽病は肝胆と三焦の病である。肝は疏泄を主り、血を蔵す。胆は中正の官で決断を主る。肝の疏泄が失調すると、気が鬱し決断を欠き苦い思いを噛みしめる。肝の蔵血作用が失調すれば更年期の瘀血や血虚に因る障害を生じる。



4、初老期は気余って血足りず

忍び寄る古い

太陰病の時代

「太陰ノ病タル、腹滿シテ吐シ
食下ラズ、自利益マス甚シ、
時ニ腹自ラ痛ム。モシ之ヲ下
セバ必ず結鞭ス」



太陰病は脾の虚寒証である。消化機能の低下と共に活力と抵抗力が衰えガン年齢に突入する。特に消化器のガンが多い。

気は焦っても体がいうことをを聞かず思わぬ大病をし易い。

5、老年期、人生の黄昏

隠せぬ心身の老い

少陰病の季節

「少陰ノ病タル、脉微細ニシテ、
但ダ寝ント欲ス」



少陰病は腎と心の病である。則ち循環系の老化である。

陰陽の根本であり、循環系や内分泌系や免疫も包括している。

歳をとると運動能力も思考力も低下し、すぐ居眠りし、寒がり、

物忘れ、難聴が著しい。動脈硬化症を始め全身的疾患が多い

ヒトも六経に沿って老化する

6、晩年は総て蒙昧模糊

厥陰病の真っ最中

「厥陰ノ病タル、消渴シ、氣上リテ
心ヲ撞キ、心中疼熱ス、飢ユレド
モ食ヲ欲セズ、食セバ則チ虺ヲ吐
シ、之ヲ下セバ利止マズ」

厥陰病は肝と心包の病である。

肝は気血の調節を主っており、心は精神活動の中枢であるので、
厥陰病では血圧や血流の調節、意識、運動などに関し心神の調節
機能が皆障害される。認知症、パーキンソン、高血圧、脳卒中などの
老年特有の病気は皆厥陰病との関連が考えられる。



- 普段ならなんでもないことに対して
いらいらして不機嫌になる
- 興奮して怒りだす